２００５年　９月１３日

保護者の皆様

ニューヨーク日本人学校
校　長　　登喜　龍一郎

９月９日付の審議会から出された保護者説明会の報告文書は、校長としての共用の考え方が保護者の方々に誤解を生じさせるような記述があり、校長として大変遺憾に思っております。

下記に、当日の「共用についての考え方」についての質問に対する発言内容を書き出すとともに、発言の主旨を最後に述べさせていただきます。

【校長として述べた９月５日の内容】

私たち在外教育施設派遣教員は文部科学省から、教育運営委員会（ニューヨーク日本人教育審議会）の管理運営の下、学校の教育活動を行うよう任を受けています。教育審議会の責任の下決定された事項にとやかく言う立場にありません。

文部科学省から派遣された教員として、どのような状況下であろうと在外教育施設に通う子どもたちのため、学校のために、常に一人一人の教員としてはもちろんのこと組織体としても全力で教育活動に最大限の努力をしてきておりますし、これからもしていくつもりでおります。

今回の売却リースバックの件でも同様であります。今後、教育活動を行っていく上で、今回の問題によって、子どもたちの安心・安全が学校として保障できる環境かどうかについては、最大限の要求をするとともに、保護者の意向を充分にふまえていかなければならないと考えておりました。特に、共用については、共用に伴う子ども同士のトラブルによる「責任の所在」が明らかになっておらず、５月２０日の審議会タスクフォース委員会以降、話し合いをしていません。８月２４日付の審議会資料Ｐ１５の内容についてもまだ決まっていない状況の内容が資料として添付されております。

先週、審議会会長から「共用によって発生したトラブルは、教育上の観点から審議会が責任を持って対応する。」と口頭での話は伺いました。しかし、口頭ではなく、その全責任は審議会が取るという具体的な表現を保護者や教職員・日本人社会に明記してほしい。学校や保護者が共用に伴う子ども同士でのトラブルで、責任を負わなければならない立場にないからです。

「責任の所在」が明確にならないと、安心・安全な学校の大前提が崩れてしまいかねません。

また、今後の相手校との共用の話し合いの前に、教員や多くの保護者の不安を払拭するために学校の職員・保護者の代表も入れた委員会を立ち上げ、共用案をまとめる作業を行い、相手校と交渉しその結果を受けて本契約交渉に臨むよう要望します。今までの一連の売却交渉がオープンにされなかった経緯をふまえ、是非、保護者も交えたオープンな場での話し合いで進めてほしいと願っております。このような過程を踏むことによって、学校の安心・安全は図られていくものと考えます。

最後に、売却リースバックに伴う教室の移動や校舎の改修・改築の費用を審議会としてバックアップしてくれること、安心・安全に対する対策を講じること、この２点がクリアできれば、学校は従来通りの質の高い教育を子どもたちのために提供できる自信はあります。さらに、現地校を隣に持つ日本人学校としての特色を色濃く出した教育活動を推進することができると考えております。

現在、審議会と保護者との間では共用以前の問題が争点となっているときであり、共用の質問への回答に躊躇しましたが、当日は、上記のように話しました。

多少言葉足らずの面もあったかもしれませんが、校長としての真意は、学校敷地の共用・建物の共用は、保護者の皆様同様、学校の教育活動を円滑に行っていく上でも重大事であり、今のままでは大変なことになると危惧しています。

その解決のためには、現在のような審議会と保護者との現状に関する認識の違いがなくなることが大前提である事は言うまでもありません。その解決が図れない限り共用問題を検討することはできないと考えております。審議会と保護者が同じ土俵の上に立ったとき、はじめて共用の問題が議論としてあがってくるものと理解しています。

その上で、さらに、

（１）共用に伴う本校における「責任の所在」や相手校との「責任分担」の明確化

（２）相手校と対等な関係での「運営のしかた」についての話し合いの場の設定

が解決されないと、前に進めないというのが校長としての私の考えです。

以上のような校長の考え方をご理解いただくとともに、９月９日付の審議会から出された文書の校長の発言の真意をお酌み取りいただければ幸いです。

８年生のワシントン修学旅行、６年生のボストン修学旅行に同行して思うことは、子どもたち一人一人が「チャンスがあれば進んで自分を変えていこう」「苦手なことにも進んでチャレンジしていこう」という意欲溢れる子どもたちの集団だという驚きです。これは、他の学年の児童生徒も同様です。子どもたちの「個性や能力を最大限に伸ばしたい」「人とかかわって生きていける力をつけたい」という願いを全教職員がしっかり受け止め、どのような状況でも子ども一人一人の成長を温かく見守っていく組織体として努力してまいります。今後とも温かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。